

# 余暇教育に関する基礎的研究

—— 都市中学生の生活およびスポーツ意識の実態 ——

東京教育大学	浅田隆夫	片岡 暁夫
"	弘中 栄子	
横浜国立大学	川口 貢	
都立第一商業高校(定)	山市 孟	荘 司 正 徳
大阪大学	高橋 健夫	

## 1. 研究の動機と目的

近年のめざましい技術革新の進展は、人間疎外的な諸状況を生じる一方で、余暇を増大させてきた。それにともない、遊びやレクリエーションの振興に対する関心が高まり、遊び場や施設の充実、指導者の養成、余暇ないしレクリエーション教育の必要性などが指摘されている。この内、施設や指導者の問題は、客体的条件の充足であるのに対して、余暇教育の問題は、主体の啓発に関するものである。これらはいずれも重要な問題であるが、本小論は特に余暇教育の問題をとりあげることにする。

余暇教育は、各人の現在の余暇の充実のための教育、とりわけその貧困な余暇活動をいかに打開するかという現実的必要性と、生涯教育、特に成人への準備教育の必要性の二面から要請されてきた。これらを教育の一領域として考える以上、発達段階に応じて(シーケンス)、どんな内容を(スコープ)教えるかが検討されなければならない。つまり、人間にとって余暇ないしレクリエーション生活を充実させることの意義やその必要性を学び(目的)、それを達成するための内容(具体的にはいろいろな余暇活動の技術やそれを行う態度についての学習が考えられる。)に精通し、その方法やその活動なり生活の評価が考えられなければならない。さらに、対象の身体的、精神的、社会的発達に応じて、活動自体や余暇やレクリエーションに対する意識が質的に深まり発展してい

くように方向づけられなければならない。従って、余暇教育とは、単に、余暇やレクリエーションに関する理論のみ、あるいはいわゆるレクリエーション活動の技術のみを教えるものではなく、人間の生きがいや生活のプランニングまでも含めた生活(特に余暇生活を中心にした)教育と考えられる。このように、余暇教育を広く、生活教育ないし指導と考える場合、それはどの機関が分担し、また一つのまとまったものとして扱われる必要があるのかという問題が派生してくる。まず、学校教育に目を向けると、現行の制度の中では、余暇教育は独立した領域としては行われておらず、各各の教科ごとに関連ある問題がとり扱われ、特別活動特にクラブ活動や行事がその重要な場になっている。戦後のわが国において、「生活」を学ぶという立場から生活教育が提唱され、学校(特に教科)と生活の断層を行事でもってつなぐ「行事単元」が注目された。それは、教科と教科外活動、ひいては地域の活動をも統一し、学校教育全体でもって生活教育を行うという構想であったが、その後、指導要領の国家基準化や、各教科は、「文化」や「科学」を教えるものであるという教科観の確立とともに崩壊していった。そしていま、教員の勤務時間の問題とも関連して、学校教育が最低行うべき役割や範囲は何かを検討され、クラブ活動や休暇中の行事のあり方が大きな問題になっている。また、一方では、生涯教育の構想の下に、社会教育とりわけ社会体育の振興が真げんに問われるようになり、公共機関のみならず民間の音楽

2.5時間が多く、休日は1.5～2時間が多く、全体に休日の方が少なくなっているが、休日は全然やらないものと非常に長時間行うものと多様に分散している。「塾やけいこの時間」は、行っている者では、1～1.5時間のものが多いが、休日は行かない者の割合が増えている。なお、学校のクラブ活動は、1～2時間のものが多いようである。

以上みてきたように、都市中学生の生活では、週日と休日の過ごし方が異っており、休日は週日の睡眠不足を補ったり、余暇活動志向の傾向が強くなっている。また、週日の生活では、授業も含めて勉強にウェイトがかけられており、それはテレビの視聴時間が長いこととあわせて、睡眠時間へのしわ寄せとなってあらわれている。

## 2. 都市中学生の余暇活動の実態

このような週日と休日の生活の仕方の違いは、余暇活動にどのように反映しているであろうか。まず、週日、休日ともにテレビをあげる者が多いことが注目されるが、その割合は、週日では男子81.1%、女子79.3%、休日では男子63.6%、女子67.9%になっている。休日の方が割合が低くなっているのは、テレビ以外の活動が活発になっているからと思われる。また、テレビ以外にラジオを聴く者が増えている（男子24.0%、女子11.9%）のは、最近の傾向である。よく視るテレビ番組では、男子ではスポーツ、マンガ、クイズ、西部劇、女子ではホームドラマ、歌謡曲などの娯楽的なものが多くなっている。しかし、京都と比べると、報道番組を視る率が高く、万才落語の割合が低くなっていることがめだっている。テレビ、ラジオ以外についてみると、週日の活動では、(1)読書（男子25.3%、女子30.1%）、マンガ（男子7.5%、女子8.1%）、(2)レコード鑑賞（男子7.5%、女子9.0%）、ピアノ（女子9.2%）、(3)昼寝（男子5.9%）、休憩、ボンヤリする（男子5.4%、女子5.5%）など、家庭内で個人の行う静的な活動がめだっている。小学生が、キャッチボール、バットの素振り、バトミントン

などのスポーツ的な活動、動植物の世話、トランプ、プラモデル、囲碁将棋など多様な活動をしてきたことからすれば、中学生の週日の余暇活動、特に身体的な活動は貧困だといえる。一方、休日に行う活動は多様に分散しており、都市の特徴と思われるショッピング（男子28.7%、女子51.0%）、およびサイクリング（男子22.9%）、キャッチボール（男子19.4%）、バトミントン、バレー（女子23.1%）などのスポーツ的活動、レコード鑑賞（男子23.8%、女子29.0%）が多くなっている。小学生が旅行、水泳、動物園、博物館、映画、観劇、スポーツ観戦など、出かけて観る活動を多くあげていたのに比べて、自ら行う活動が多くなっている。これに対して、休暇の活動の主なもの、旅行（男子57.9%、女子57.4%）、田舎へ行く（男子37.8%、女子36.8%）や、海水浴（男子42.8%、女子38.2%）、登山、つり（男子28.1%）、キャンプ（男子18.2%、女子10.3%）などの野外活動である。以上のことから、週日の余暇活動は、テレビや家庭内で行われる静的な活動にとどまり、休日、休暇でいわゆる趣味やスポーツ的な活動が行われていることがわかる。次に、これらの活動の行われ方をみると、生活計画を「休暇時のみたてる」という者が多い（男子44.6%、女子57.8%）ことを反映して、休暇の活動では、「前から計画していた」もの（男子68.0%、女子59.1%）や「行事」として行われるものが多い。しかし、一方では、「急に思いついて」行ったという者が、男子に34.1%、女子に20.7%いることが注目される。また、「行事」の内では、「学校の行事やクラブ活動」で行ったものが、男子29.1%、女子35.8%おり、学校の特別活動の占める割合が大きくなっていることが認められる。性別では、全体の生活の計画をたてている者は、女子の方が多い。次いで、それらの活動を一緒に行う人についてみると、週日の活動では個人で行う者が多いことは前述した通りであるが、休日の活動では、「一人で行う」（男子74.2%、女子45.5%）、

やスポーツなどの塾や教室、サークルなども年々活発になりつつある。さらに、親子の断絶や青少年の非行化の問題とも関連して、家庭教育の機能とは何かが問われている。このように、学校教育、社会教育、家庭教育すべてを含めて、教育とは何かが問いなおされようとしている現在、その一環として、生活教育ないし生活指導としての余暇教育のあり方を検討することは意義あることと思われる。そのためには、まず、現実の余暇生活の実態やその問題点を整理し、今後それらをどのように余暇教育として方向づけていくかの視点を検討する必要がある。(一方では、人間存在ないし生活の理想像への哲学的教育的アプローチも必要であることはいうまでもないが……) そこで、本小論では、今後の余暇教育を検討する視点を導くことを目的として、以下都市中学生を対象にした実態調査に基いて考察をすすめることにする。ここで、都市中学生を対象にしたのは、先に発表した「都市児童の遊戯の実態調査」(日本レクリエーション研究会編『レクリエーション研究』第6、7合併号、1971年3月)の継続研究としてである。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 実態調査について

実態調査は、次のように行った。

- (1) 調査方法 質問紙法によるアンケート調査  
 (2) 調査期日 昭和45年11月下旬  
 (3) 調査対象 中学1、2年生、男女  
 計 2,062名

#### 内 訳

所在地	学校名	男子	女子
東京	武蔵野1中	97名	87名
	3中	120	85
	4中	292	222
	5中	63	61
	(計)	572	455
京都	二条中学	363	190
	上京中学	243	239
	(計)	606	429
計		1,178名	884名

ここで、東京と京都の中学校を選んだのは、先の小学校の実態調査で、居住環境(住宅、団地、商業、工業の地区別)の影響が大きいことがわかったが、今回はさらにそれを拡大して、最近都市開発や人口移入が顕著であるいわゆる新しい都市(武蔵野市)と比較的伝統的な古い都市である京都市の比較を試みたからである。ここでは、武蔵野市を中心に考察し、関連あるもののみ小学校と比較し、また特に新しい都市的傾向の著しいもののみ京都と比較した。

### (4) 調査内容

広く中学生の生活実態やスポーツや遊びに対する意識について調査しているが、主な内容は、①身体的社会的発達、②生活構造、③余暇活動、④クラブ活動、⑤塾やおけいごと、⑥スポーツ意識についてである。

## 2. 考察の視点

これらの調査結果を考察するにあたっては、特に、(1)中学生の発達の特性、(2)都市化現象、(3)教育的価値との関連を留意した。

まず第一に、中学生の発達の特性をみると、身体的に著しい発達を示す時期であり、「体格についてみると、女子はほとんど成人の状態に近い発達を示し、男子は女子よりやや遅く、まだ発達の途上である。一方、体力や運動能力では、男女とも著しい発達をみせ、特に筋・神経系の協応能力と呼吸循環機能はほとんど成熟の域に達しており、筋力はまだ発達しつつある時期である。」<sup>1)</sup>といわれる。従って、この時期には身体活動が重視されねばならず、しかも、「小学校期のような遊戯的運動よりも、スポーツのような競争を併う激しい運動に興味と関心を示すようになり、運動技能についても程度の高いものを求めるようになる。」<sup>2)</sup>といわれるように、スポーツが重要な位置を占めることになる。また、精神的には、児童期の子どもらしさから青少年期のおとならしさへの移行を示す時期である。自己意識が強くなり、家族よりも友人関係が重みをもつようになり、組織的集团的活

動が可能になる。その意味で、クラブ活動や休暇中の行事などの集団活動が重視されなければならない。

第二は、経済の高成長、技術革新の進展とともに社会や国民の生活が急激に変化した、それらが中学生の生活にどのように反映しているかの問題である。最近中学生も含めた青少年問題として注目されているものに、体力の低下や肥満児の問題、心身の発育の加速化現象にもなる性や非行化の問題、政治活動の問題などがある。このような問題が生じる背景として、過度の受験準備教育、モータリゼーションや交通の発達、遊び場の不足など欲求不満や運動不足を生じる要因や、テレビ・雑誌・マンガなどマスコミュニケーションの発達による刺激過剰、大衆消費社会・レジャーブームと呼ばれる社会の風潮やモラルの低下、夜が遅く朝が遅い都市型の家庭生活や過保護な家庭教育などの都市化現象が考えられる。このような問題と関連して、中学生の生活の全体構造、特に毎日の生活時間や休日・休暇の活動との関係の実態が明らかにされる必要がある。

第三は、教育的価値の面からの考察であるが、これは主に、今後の余暇教育の方向づけを考える視点になる。人間形成や全面発達におけるスポーツや音楽をはじめとする余暇活動の位置づけや価値を明確にし、発達段階に応じた指導が試みられなければならない。この問題と関連して、スポーツや遊びに対する意識の実態が問われる。

以上の3つの視点に照らして、(1)生活の構造 (2)余暇活動、(3)クラブ・サークル活動、(4)スポーツ意識について、以下考察をすすめる。なお、本小論では、これらの全体的傾向を概観することを主なねらいとし、次報で各々の領域について詳細に検討する予定である。

## Ⅱ. 結果の考察

### 1. 都市中学生の生活構造

都市中学生の生活構造の最も大きな特徴は、週日と日曜・祭日などの休日との生活の仕方の相違

である。週日において、1日の生活の中で最もウエイトを占めているものをみると、第一位は、男女とも約半数が「学校の勉強」をあげ、次いで30%近くが「クラブ活動」をあげている。第三位は、男子では「家の内外での遊び」、女子は「家での勉強」、第四位は三位の逆、五位には「学習塾」があがっており、全体的には、勉強にウエイトがかかっていることがわかる。一方、休日の過ごし方をみると、「勉強の日」と答えるもの男子8.9%、女子9.2%はごく少なく、「趣味や遊びの日」（男子73.8%、女子65.9%）、「片づけたり休息する日」（男子33.4%、女子53.4%）、「友だちや家族と過ごす日」になっており、週日と休日の過ごし方が区別されていることが明らかである。東京で「趣味や遊びの日」が第一位にあげられたのに対して、京都では低率であり、「ふだんと同じ」、「家族と過ごす日」が高率を示しているのは、大きな違いである。これを生活時間でみると、「睡眠時間」ははじめ「テレビの視聴時間」、「その他の遊びの時間」、「手伝いの時間」は、全体に週日に比べて休日の方が長くなっており、「勉強時間」は逆に減少している。生活領域ごとの時間の特性をさらに詳しくみると、「睡眠時間」は、小学生に比べてかなり短く、週日では、8時間以下のものが36%を占めており、休日ではこれを補うかたちで10時間以上のものが男子48.6%、女子36.3%になっている。「テレビの視聴時間」も小学生に比べると短くなっているが、週日では1～3時間の者が多いのに対して、休日では3～5時間のものがかなりの率を占めている。「その他の遊びの時間」は、1～1.5時間という者が33～35%で最も多いが、小学生の男子の41%が戸外で3時間以上遊んでいたのに比べて、かなり少なくなっている。また、テレビを除くと遊びの時間なしというのが、男子9.6%、女子8.4%いることが注目される。「手伝いの時間」は、1時間以下（男子の33.6%は「なし」と答えている）というものが多く、休日はその時間がやや長くなっている。一方、「勉強時間」は、週日では2～

「学校の友人」(男子65.5%, 女子51.7%)家族全員, 兄弟姉妹, 父母など家族と行うものがめだっている。性別では, 男子は「一人」で行う者, 「学校の友人」と行う者の率が高く, 女子はどちらかといえば「家族」と行う者が多い。一方, 休暇中の活動では, 「一人」で行う者は少なく, 「学校の友人」や「家族」との活動が多い。小学校と比べると, 「近所の友だち」の占める率が低くなり, また京都に比べても低率であって, 地域的なつながりがうすくなっていることがわかる。また, その活動を行う場所を比較的余暇活動の多く行われる休日についてみると, 「自分の家や庭」をあげる者の割合が高く(男子71.2%, 女子72.8%), 次いで, 小学生ではみられなかった「商業施設」(男子39.7%, 女子30.8%)がめだっている。反対に, 「広場や空地」, 「公園や遊園地」を利用する者の割合は減少している。これは, 一面では, 中学生の利用できる広場や公園が数少ない状況を反映していると考えられる。

要するに, 中学生の余暇活動の実態では, 特に週日では身体的活動が不活発であり, 今後, 比較的余暇活動志向的な生活がなされている休日と, 計画的組織的活動が可能な休暇の余暇活動の方向づけが検討される必要がある。

### 3. 都市中学生のクラブ・サークル活動

中学生の発達段階では, 友人関係や集団活動が重要な位置を占め, また, 週日の活動でクラブ活動にウェイトをおいているものが二番目に多いことを指摘してきた。いま, 武蔵野市の学校のクラブ活動への加入率をみると, 98%でほとんど全員が参加しており, 中でも運動クラブに所属する者が多い。(男子74.8%, 女子63.9%), このことは, 中学生にとってスポーツが欠くことのできない活動であり, しかも学校の授業やクラブ以外には週日にはほとんど身体活動が行われていないことからすれば, 運動クラブへの参加が高率であることは, 高く評価されてよい。運動クラブ員と文化部員の生活を比較してみると, (クラブ不参

加者が少ないので, ここでは文化部員と比較した) 次のような特徴がみられる。健康状態(身体状態)では, 文化部員の方に, 「朝礼時などに貧血や気分が悪くなる」, 「運動時に息ぎれやどうきがする」, 「ねんごをしやすい」, 「疲労しやすい」, 「病気やゆううつになりやすい」, 「食欲不振である」という者の割合が高く, 運動クラブ員の方が健康状態にすぐれている。特に, 男子にその傾向がはっきりでている。生活時間では大差はみられないが, 女子において運動クラブ員の方がやゝ睡眠時間が長く, 勉強時間が短くなっている。余暇活動に関しては, 週日の活動では, 男子は運動クラブ員の方が「テレビ・ラジオ」, 「レコード鑑賞」, 「あそび」の率が高く, 文化部員の方が「勉強」や「読書」の率が高くなっている。女子では, 運動クラブ員の方が, 「勉強」, 「テレビ」の率が高く, 「レコード鑑賞」や「ピアノ」は文化クラブ員の方がやゝ高くなっている。また, 休日の活動では, 運動クラブ員に, スポーツの試合(男女), ボーリング, キャッチボール, 水泳(男子), サイクリング, バレー, バトミントン(女子)など身体的活動を行う者の率が高くなっていることが注目される。また, 友人関係についてみると, 「親友」に恵まれているものが男女とも運動クラブ員に多く, しかも, 「クラブ活動」を通して親友になった者の割合が多い。以上みてきたように, 運動クラブ活動は, 生徒の健康状態や友人関係によい効果を与えており, また, 運動クラブ員と文化クラブ員の生活に大差がないことから, 運動のやりすぎによる弊害はあまりみられないと考えられる。これに対して, 文化クラブ員では, 身体的活動がほとんど行われていないことについての対策が検討されなければならない。しかし, 一方では, 運動クラブ員の内, 男子12.3%, 女子15.8%が, 練習にほとんどあるいは全然参加していない, いわゆる名目クラブ員であることに目が向けられなければならない。しかも, 選手や一般クラブ員のクラブに対する不満や希望事項が, 施設や運営や指導の仕方に関するものが

多いのに対して、これらの名目クラブ員は全体に不満が多く、特に「自分のやりたいクラブがない」、「能力に応じた役割を与えてほしい」、「よい仲間がない」、「テレビやマンガをみる方が楽しい」、「運動クラブに入っていると自分のしたいことができない」など個人的な不満の率が高くなっており、また、「楽しく仲よくや〜ていくようにしたい」と希望するものが多い。最近、このような集団活動による教育的効果を見捨てて楽しむばかりという傾向や、一方では勝敗第一主義的、選手中心主義的なクラブ運営の傾向が強くなっていることから、改めて、クラブ活動の理念や運営の仕方を検討していかなければならないであろう。

次に、学校のクラブ活動以外の地域や民間のサークル、塾・おけいこ教室への参加の状況を見ると、学習塾を除くとあまり活発ではない。スポーツ関係の塾や教室への参加状況も低率であるが、男子の方が全体に参加率が高くその種目も多様である。また、学校の運動クラブ員と文化クラブ員の参加率の比較では、前者（男子25%、女子12.8%）の方が後者（男子18%、女子1.4%）より高くなっている。その他のおけいこごへへの参加は、ピアノ（20%）をはじめ、女子の方が多くなっている。また、地域の活動では、小学校で「子ども会」が約60%の参加で活発であったのに比べて、中学校では不活発である。このような地域や民間のサークル活動は不活発とはいえ、近年徐々に伸びており、社会体育振興方策と相まって、今後ますます発展していくことが予想される。学校のクラブ活動が教育活動の一環として行われるのに対して、個人が加入するこれらの活動は、趣味的レクリエーション的性格の強いものといえる。上述の塾やおけいこごとへの参加の理由をみると、小学生では、「将来役にたつため」、「上手になりたいため」が多く、また京都では、「成績向上のため」をあげるものが最も多かったのに対して、東京の中学生が「好きだから」という理由をあげている者が多い。

このことは、趣味や生涯のレクリエーション活動へ発

展していくことが期待できる。また、現在「熱中している趣味活動がある」と答えるものは、男子65.6%、女子49.5%である。その活動種目は、蒐集、スポーツ、音楽など非常に多様であり、その継続期間は、1〜3年以内、3〜5年以内のものが高率であるが、5年以上のものが男子20%、女子15.5%いることが注目される。このように継続期間が長いことは、一方で、熱中している趣味活動をもたないものとの差が大きいことを意味し、今後もたない者の対策が急がれる。

以上、学校のクラブ活動やそれ以外のサークル活動の実態についてみてきたが、学校のクラブ活動を除いては全体に低調であり、今後の発展が望まれる。特に、学校の運動クラブに入っていない者の身体活動が貧困であることについては、検討する必要がある。

#### 4. 都市中学生のスポーツ意識について

以上中学生の段階で、スポーツの重要性が認められるにもかかわらず、学校の運動クラブの活動を除いては、ほとんど行われていないことを指摘してきた。しかし、実際には活動していないとはいえ、彼らはスポーツや遊びに対して、旺盛な興味と健全な意識をもっている。どんなスポーツや遊びが好きかという質問に対して、「自由の中にもきちんとしたルールがあり、いわばルールの中での面白さを味わうようなスポーツ」（男子62.6%、女子65.9%）、「サッカーや陸上競技のような自分の能力を出しつくして競いあえるスポーツ」（男子50.1%、女子34.7%）など、カイヨワのいう「アゴーン」への志向が、アレア（「宝くじやトランプ、オートレースのような勝敗が全くわからない運命を天にまかせるようなスポーツ」）、イリンクス（「高速道路をオートバイで爆音をたてて疾走したり、ゴーゴーで狂気したり、アイススケートで回転するなどスリルを味わったりめまいを感じる遊び」）、ミミクリー（「映画スターがある人の役割を演じたり、仮装行列のように自分以外のものまねをしたり、プラモデルをつくっ

たりすること) 的なもの、及び「スポーツはもともと遊びであるから、勝手気ままに自由に行えるようなものが好きだ」という「パイディア」的なものに比べて、非常に高率になっていることが注目される。このことは、実際にやってみたい活動として、「サッカー、バスケット、バレー」などのアゴーン的な要素が強く、しかも集団で行うものが多く望まれていることから裏付けられる。また、スポーツのよいところ(価値)についてきたところ、「体を丈夫にする」、「意志を強くする」など目的的なもの(男子52.3%, 女子58.9%)が、「スカッとする」、「楽しい」などの感覚的なもの(男子39.5%, 女子37.8%)より高率になっている。また、スポーツの試合で大切な点として、男女とも「正々堂々と真面目に行うこと」、「苦しさに負けずにがんばること」など、個人の態度が高く評価され、ついで、協力やチームワーク、先生やコーチの技術的注意を守ることがあがり、「ルールぎりぎりの範囲であらゆる方法を使って戦う」という勝敗第一主義的な考えは低く評価されている。このことは、中学生はスポーツや遊びのもつ競争性に強い関心を示すとともに、それらを非常にまじめなものとして位置づけているといえる。このこと自体は、教育的にみて望ましいことであるが、生活の中でスポーツ活動を楽しむという意識や態度をいかに啓発するかは今後の課題として残される。

#### IV. まとめ

以上、都市中学生を対象とした実態調査を(1)生活構造、(2)余暇活動、(3)クラブやサークル活動、(4)スポーツに対する意識の4つの側面から概観してきた。考察の結果、明らかになった点は次のようなものであり、それらは余暇教育のあり方を今後検討していく際、十分に考慮されなければならない問題だと考えられる。

(1) 発達の課題から身体活動や友人関係が重視され、また、現代社会特に都市化現象との関連では、個人の主体的活動の必要性が痛感される。

その意味で今後クラブ・サークル活動としてのスポーツの振興が重要な課題となるであろう。(学校のクラブに限らない) そこでは、体力の向上や運動欲求の充足のみでなく、望ましい友人関係や生活の楽しみを味わうことが期待される。

(2) 休暇や地域の活動に関連して述べると、都市的環境の中で失われたものの回復や自主的活動の経験を求めて、十分な指導の下に、キャンプなどの野外活動を行ったり、奉仕活動などの社会とのつながりをもった活動を振興することの必要性が痛感される。

(3) 生活構造の実態から、受験勉強をはじめとする勉強、クラブ活動などによって週日はゆとりのない生活になっているのに加えて、テレビやラジオの視聴時間が長いことが余暇活動の貧困の大きな要因であった。そして、それは、休日の睡眠時間の増加や余暇活動志向的な生活によって補足調整されていた。このことから生活を計画的に行うことによって、主体的に余暇活動ができる時間を生み出すとともに、いわゆる「生活のきりかえ」をうまく行って、余暇時間を楽しむ態度を確立していくよう方向づけていくことが大切であると思われる。これは、特に、長期休暇の生活指導において考慮されるべき問題であろう。

(4) 以上のことから、余暇教育は、学校教育、家庭教育、社会教育から広く検討されなければならないことが明らかである。学校教育では、原則として全員参加の活動の指導を行うべきであるので、活動の基本的技術や計画や運営のし方を主にとり扱うことになろう。社会教育関係では、学校のクラブ活動が徐々に地域や民間の活動に移行していくと予想されることから、従来のエリア・サーヴィスやプログラム・サーヴィスに加えて、クラブの紹介や適性の相談などのカウンセラー的なサーヴィスやクラブの助成などが要請される。また、家庭においては、家族の規律ある生活やそれによって生じる余暇を主体的な活動で楽しめるように、家族全員がとりくむことが必要であろう。特に、休日・休暇の活用は、これからの大きな問題と思

われる。また、中学生の段階では、完全に自立して行動させることは、放任になりやすく、やはり家庭での教育をおろそかにできないであろう。休暇などの活動において、家族旅行の計画を中学生に計画させたり、友人との活動の責任の所在を明確にさせるよう指導することなどが、その一例として考えられる。

(5) 以上のような都市中学生の生活やスポーツ意識の実態から提示された問題点をふまえて、今後余暇教育を構造的にとらえ、プログラムやカリキュラムの問題を具体化していく作業が残される。

本小論では、主に被教育者である都市中学生の諸問題を取りあげたが、これを教育する側、つまり、教育委員会（社会）－教師（学校）－両親（家庭）の諸条件の検討も今後の大きな課題である。中でも、教師の果すべき役割や指導能力は、重要な問題と思われる。

（文責 弘中栄子）

- 1).2) 文部省、「中学校指導書 保健体育編」昭和45年5月、東山書房